

日本の里地里山30 保全活動コンテスト

本県から2団体顕彰

雑木林や田んぼが広がるなど、懐かしさを感じさせる身近な風景を守ろうと取り組んでいる団体を顕彰する「日本の里地里山30 保全活動コンテスト」(読売新聞社主催、環境省共催)で、本県からは、「NPO法人自然塾丹沢ドロン会」(秦野市)と「恩田の谷戸ファンクラブ」(横浜市青葉区)が、全国30団体の中に選ばれた。それぞれの活動を紹介する。



復元した棚田で田植えに備えて田んぼを整備する自然塾丹沢ドロン会メンバー(秦野市名古木)

棚田を復活

NPO法人自然塾丹沢ドロン会

(秦野市東田原)

活動開始は一九九一年十二月。丹沢の開発を動物の目線で描いた童話「ドンドンが怒った」の発行を機に、丹沢を愛する作家や画家、編集者、教員、読者らが「丹沢の自然を守ろう」と立ち上がった。

当初は、十人ほどだったメンバーも、「子供たちに自然保護活動を継承して欲しい」と、世帯単位で会員を募り、現在は百二十世帯にまで増えた。岡進代表のもと、下草刈り、堆肥作り、シイタケ栽培、炭焼き、道標作り、散策コースの整備など、挙げるときりがないほどの活動を展開する。

「恩田の谷戸」の直売所で野菜を求める高橋さん(左端)、藤田さん(左から2人目)の両代表



農家の応援団

恩田の谷戸ファンクラブ

(横浜市青葉区)

「恩田の谷戸」は、横浜市の北西部にある。面積は約四十ヘクタール。宅地に囲まれた、雑木林、水田、小川の丘陵地ではかつて当たり前に見られた原風景の面影が残る、数少ない場所の一つだ。

会員は横浜市北部を中心とする市民ら約百二十人。発足は一九九一年八月十日。八月の「ヤ」と十日の「ド」で谷戸の日を選んだ。恩田の谷戸はすべて民有地。小川の岸を丸太や板で

一〇〇一年九月には、NPO法人の認証を取得。二借りて、棚田の復元に努め〇〇二年六月からは、使われている。雑草や低木を取り

除き、昨年からは、田植えもできるようになった。今年、同会が主催する「丹沢自然塾」に応募してきた一般参加者も加わって、十二日に田植えを行うことになっている。

補修したり、雑木林の下草刈りに参加したり、直売所で使える地域通貨「野菜券」を活動参加者に配って、使われた分を現金に引き換えるなど、地権者との連携を大切にし、「農家の応援団」を自任する。また、ホタルやホトケドジョウ、野鳥などを守り、観察する活動にも力を注ぎ、市民が谷戸に触れることができ、機会を提供している。

クラブの代表は藤田廣子さんと高橋多枝子さん。藤田さんは「この谷戸は横浜の誇り。次の世代に伝え、残すためにも、市なども巻き込んで、農業が続けられる環境作りに取り組みたい」と決意を語る。

専務理事の片桐務さん(54)は「自然からエネルギーをもらって、自然保護活動の輪を広げていきたい」と話していた。